HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	信用貨幣の生成原理に関する研究［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	海, 大汎
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(経済学)
Dissertation Number	甲第14031号
Issue Date	2020-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/78626
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Hae_Daebeom_review.pdf, 審査の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

様式９

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（経済学）　　氏名：海（へ） 大汎（デポム）

審査委員	主査　特任教授	佐々木憲介
	副査　特任教授	岡部洋實
	副査　教授	竹内晴夫（愛知大学）
	副査　教授	清水真志（専修大学）

学位論文題名

信用貨幣の生成原理に関する研究

本論文は，信用貨幣の生成原理を，商品論（価値形態論）の枠組みにおいて解明しようとしたものである。

マルクス経済学では一般に，信用貨幣は支払手段としての貨幣の機能と社会的再生産とに基づいて発行されるとされる。また，信用売買（商業信用）では，商品と貨幣の授受の時間的なズレのために信用価格と現金価格とに乖離が生じるが，その差額は利子ではないとされ，利子は銀行による手形割引(貸付)において発生するとされる。信用売買も利子も，商品論の領域を超えるテーマとされてきた。これに対して本論文は，こうした見方には，(1)商品交換の正則は単純な商品流通であり，(2)信用貨幣は変則的な商品交換（信用売買）に由来するという市場像／貨幣像が通底しているとして，それらの批判的な検討を通じて信用売買・信用貨幣の生成原理を解明しようとするものである。

第 1 章「問題の所在―信用売買の理論領域」は，信用売買は貸借形式をとる商品交換であり，その際の一定期間の貨幣の用益権(資金)の価格として利子が発生するとして，利子の生成に関する従来の理解を批判する。「信用売買の約定価格」＝「貸付+利子」の関係において，商品と資金という二種の「商品」が売買されるのである。

第 2 章「商品交換の成立原理」は，商品交換は権利の獲得と義務の履行とをめぐる所有主体（＝経済主体）間の関係を土台としており，信用売買が通常の商品交換と異なるものではないことを明らかにする。商品の授受の時間的なズレは，価値関係において二義的な意味しかもたない。それゆえ，現金売買も信用売買も私的所有権の移転に他ならないのであって，単純な商品交換を正則とする原理的な必然性はない。

第 3 章「貨幣生成の論理構造」は，商品価値の保蔵の契機について考察する。価値形態第 2 形態における商品所有者の二つの戦略(次善の策への旋回／間接交換)それぞれの困難のうち，前者では，価値表現の臨界点において所有商品の保有･保管を余儀なくされること，

後者では，商品交換の量的・質的ミスマッチにより残余の保有･保管を余儀なくされることに着目する。そして，保有･保管のコストや商品の劣化などに対し，経済主体は，積極的な消費衝動とは無縁のものを入手しておこうとする消極的な防御機制に迫られるのであり，それによって比較的長期にわたり価値保蔵が可能なものへの需要が創出される。その需要は，一般性を獲得することで保蔵のための保蔵という需要に転換するのである。

第 4 章「貨幣の内なる二面」は，市場を囲む非市場を富の世界として再規定し，市場と非市場とを結びつける貨幣の存在を抽出することで，信用貨幣(信用売買)生成の理論的な土台を提示する。流通手段の延長として捉えられてきた貨幣蓄蔵の契機を再考し，単純な商品流通の基底にある貨幣観/市場観を批判することで，貨幣は，市場(商品領域)と非市場(富の領域)とを結びつけるものとして生成するとしている。

第 5 章「信用貨幣の流通根拠」では，商品論の枠組みによる信用貨幣の生成原理の追究が試みられている。「p 量の商品 X＝q 量の商品 Y」のような価値表現には，「商品 X」の所有者は是が非でも「q 量の商品 Y」を受け取らなければならないという必然性はない。「商品 X」の所有者は，「商品 Y」でもって比較的長期にわたり「p 量の商品 X」の価値を保蔵できると判断すれば，現物に代えて，「q 量の商品 Y」を譲渡するという債務証書を受領する。そして，そのような「商品 Y」の（交換性とは区別された）価値保蔵性は貨幣形式によって与えられるのであって，その物質的な特性･特質は二義的なものにすぎない。現代の不換銀行券も，現物貨幣の一様態にカテゴライズされうる点で商品論的根拠をもつが，それはこの意味においてにすぎないのである。

最後の「まとめ」は，各章の主要な論点を再確認するとともに，債権債務関係の形成と展開を基軸とした現代資本主義の特質に触れて締め括りとしている。

本論文の特徴は，商業手形・銀行券などの信用貨幣の生成根拠を，従来の原理論研究で重視されてきた社会的再生産との関係に求めるのではなく，商品論という，最も基礎的な領域との関係において解明しようとした点にある。現代の不換銀行券の流通根拠を商品論の射程において明らかにしようとすることが，現代資本主義のどのような側面を明らかにするのかについては，必ずしも明確ではない。しかし，1950 年代以降の主要な先行研究と最近の研究動向の渉猟においては他の追随を許さないほどであり，諸説への批評を重ねてテーマに粘り強く迫っていること，信用関係を商品論の領域において捉えるという，近年みられる原理論研究の最先端の動向を見極めつつ信用貨幣の生成根拠を明らかにしていることなどの点から，審査委員は全員一致して，本論文は博士（経済学）学位に値する業績であると認める。